ニ　書店を捜索

　それにしても、一体誰が、こんなギャグのような小説を書くのだろうか。良太もいつかは作家になりたいと、本や新聞、雑誌等を読んで、インスピレーションを受けた言葉やあらすじから、パソコンに小説を打ち込んでいるが、こんな内容の小説は書いていない。感銘や感動を受けた小説に影響を受けて、知らない間に似てくることはある。だけど、これらの作品は、意図的に、有名作品をパロディにしたり、換骨奪胎したりしている。それとも、単に、悪趣味の物真似なのか、いや、真似までも至らない、失敗作品なのか。それでも、こんな小説が出版され、本屋の棚に並ぶなんて、良太にとっては、本音のところうらやましい。妬ましい。怒りが込み上げてくる。本を放り投げたくなる。再び、冷静さを失くし欠ける良太。

　いや。待て、待て。

　なんとか気持ちを落ち着け、「乗り遅れた森」を元の位置の場所に静かに戻す。自分も小説を書いているし、読書は好きだ。途中まで読んだ本をしおりを使わずに、ページを折ったり、広げたまま机の上などに置いたりはしていない。まして、本を投げ飛ばすだなんて論外だ。自制心が働いた。

　そうか。良太は気づく。自宅にメールがあったように、この書店は無名の作家による本屋なんだ。ただし、本を出版するためには、読者の気を引くため、有名な作家の作品のパクリを書かないといけないんだ。

「立ち読みはダメです。本を買ってください」

　受付の人間型ロボットがこちらに首を回転させている。こうなったら、この本屋を徹底的に調べてやろう。良太はロボットの視線を無視して、奥の書棚に向かう。単行本から文庫本までがずらりと並んでいる。小さな本屋にしてはすごい量だ。世の中には、自分のように、作家になりたく本を書いているが、売れない本、目立たない本、話題にならない本が星の数ほどあるのだろう。まさに、地上のくず星だ。だけど、そうした作家もどきの人たちにとっては、この本屋は聖地なのかもしれない。すると、俺にとっても・・・。

　確かに、昨今のこと、インターネットでも、素人作家、日曜作家たちが無料で、自由に投稿できるサイトがいくつかある。良太もそのうちの一つに作品もどきを掲載している。自分では他の人の作品をあまり読まない癖に、自分の作品の閲覧回数が増えるのを期待している。供給者は多いのに需要者は少ない。需給のアンバランス。まるで、今の日本の経済状況と同じだ。人々は貯蓄ばかりして、消費をせず、その結果、資金は潤沢にも関わらず、投資されないので、お金が回

らず、経済が悪化する。負のスパイラル現象だ。

　うーん。どこの世界にも通じる話だ。いや、どこの世界もそうなのかもしれない。本物がいずに、まがいものだらけの世界。まがいものが、返って、純粋な消費者、読者を遠ざけ、消費が進まない状況を生み出しているのだろう。悪本が良本を駆逐し、正式な消費者、読者がどんどんと本を読まなくなっていく。それが証拠に、町の本屋も次々と消え去っている。また、この本屋も良太以外にお客はいない。作家もどきたちは自分の作品を提供するけれど、他人の本は購入しないのか。

　良太が足を止めた棚は童話コーナーだった。良太は本を手に取る。題名は「１００万回死にそうになったのら猫」。どこかで聞いた、見た、読んだ童話だ。これだけパクリ本があると、原本が何なのか、推理するのが楽しくなる。人は、何にでも喜びを見つけられる生き物なんだろうか。良太は帯を読む。

「今、日本に何匹の、のら猫がいるとあなたは思いますか。その猫たちは、いつも、車にひかれそうになったり、食べ物がなく、お腹が空かして、苦しんでいます。また、皮膚病で毛が抜けたり、目やにで目がみえなくなったりしています。中には、癌などの重病に侵さ、死に至る猫たちもいます。この童話では、こうした猫たちのことを描いています。皆さんも、これらの猫たちを見かけたら、是非、愛の手を差し伸べてあげてください。もう、お互い、処分するのも、処分されるのもごめんです。そうです。次は、あなたの番かもしれないのです」

　うーん。考えさせられるコメントだ。この本屋の本は、単なるパロディだけではないんだなあ。パロディを通じて、現代社会の課題や闇をあきらかにしているんだ。感心する良太。

　良太は隣の棚に移る。そこは推理小説のコーナーだった。推理小説は、良太が好きなジャンルだ。手に取ったのは「刑事コロンダ」。

　昔、テレビでこの本の題名を真似した題名の本を映像化した番組が放送されていた。面白くて、毎週、待ちかねたように観たものだ。いや、違う。「刑事コロンダ」が真似をしているのだ。ここの本屋にいると、何が本当で、どっちが偽物なのか、わからなくなる。

　この前もテレビを観ていたら、日本で有名な駄菓子が、承諾もなしに物まねされて、他国で販売されており、その国の子どもたちは当然、自国の商品と認識していたことを放送していた。著作権等はあるだろうが、ある意味、人類は物まねをすることで文化を発展させてきたのは事実だろう。

　良太は本の帯を見た。「道路や廊下で転ぶ。犯人の貴重な手がかりをなくす。犯人を目の前に

して、何を詰問しようか、と、ど忘れをする。肝心の犯人を間違え、仲間を逮捕する。など、おっちょこちょいで、少しボケが始まっている刑事が、仲間や被害者、はてまた犯人までの力を借りて、事件を解決していく。そのおっちょこちょいぶりが、読者に、主人公に何とか犯人を捕まえて欲しい、事件を解決して欲しいという気持ちを抱かせ、食事も忘れ、ついページをめくって読んでしまうストーリー。今、話題の本」

なんだ、これは。やっぱり、下手なパロディじゃないか。こんな本を棚に置くぐらいだから、大した書店じゃないな。良太の中で評価が一挙に下がる。

次は、歴史書コーナーだ。高校生の頃は、日本史が好きで、歴史にちなんだ小説もよく読んだものだ。定番の「良馬が行く」の本を手に取る。帯を見る。

「戦国時代を制したのは馬だった。鉄砲が伝来されてからも、馬は武士にとって、強大な戦力の一つであった。また、農耕や運送の際には、人間の何倍もの力を持つ貴重な労働力であり、生活を共にする仲間であった。あらためて、歴史を紐解く名著」と書いてあった。

なるほど。定番の小説と内容は異なるけれど、この本はこの本で納得がいく。確かに、当時は、騎馬軍団で諸国を統一した武士がいたから、疾風怒濤で敵を打ち負かすには馬は必要な戦力だったはずだ。また、農耕の際は畑などを耕す力の源であり、米などの荷物を運ぶ際には人間の何倍もの力があっただろう。いまだに何人分もの仕事をしたり、元気はつらつな人を、あの人は馬力がある、と例えるではないか。そういう視点で、本を書くのもありなんだろう。妙に納得する良太。

次の書棚コーナーへ向かう。ビジネス書だ。どこの本屋でもビジネス書が売れている。社会人のほとんどがサラリーマンだ。新入社員であれ、最初に部下を持つ係長職であれ、中間管理職であれ、自分が進むべき方向性や自信を持つために、ビジネス書を渡り歩いている。どのビジネス書も、中身は、これまで書かれたことを焼き直したものがほとんどだ。だけど、サラリーマンは、聖書なのか、仏教書なのか、心理学書なのか、心の安寧を求めて、今日も本屋のビジネス書の前で立ち止まる。良太も同様に立ち止まる。手に取った本は。

「君たちはどう息を抜くか」

思わず、はあ、と息を吐いた。帯を見る。

「これまで、数多くのビジネス書が書かれてきた。そして、皆さんも多くのビジネス書に手を伸ばしてきたことだろう。この本の著作者も、皆さんと同様に、そうした本をすべて読破し、自分なりに感動したり、役立ちそうな言葉やフレーズをメモしてきた。それを実行しようとした。

だが、ほとんどの場合、上手くいかないことが多かった。そのため、更に、多くのビジネス書を漁った。

　ある日、気分転換に、家の周りをランニングしてみた。最初は、全力疾走で走った。だが、全力疾走すると、息ができないことに気づいた。息をするためには、適度に、息を吐くことが必要である。息を吐けば肺が縮小し、自然に空気を吸うことができるのである。そこで気が付いた。仕事も同じだ。頑張りすぎるんじゃない。頑張る中で、いかに息を抜くかということを。

　息を抜くことで、見えなかったものが見えたり、気づかなかったことを気づいたりするのだ。この本は、息を抜くことを通じて、生きにくさから脱却し、粋な境地にたどり着いた著者の人生書である。そう。それこそ、君たちはどう生きるかである」

　まあ、確かにそうだろう。自分も、いざ、面白い、素晴らしい作品を書こうと思い、パソコンの前に座っても、脂汗以外、何も出ないことが多々ある。反面、自転車通勤やトイレの中など、作品のことを考えていない場合に、テーマや題材を思いついたりする。それが、息を抜くことなのだろうか。でも、どこかで聞いたような作品名だ。

　良太は納得しながらも、あることに気付いた。

　どうも、この書店の本の帯の文面は文学評論家などの第三者によるものではなく、この本を書いた作家によるものじゃないだろうか。あまりにも褒め過ぎだ。人は叱るよりも褒めて才能を伸ばせと言うけれど、これは自我自賛としか言いようがない。再び、評価が下がる。

　あれこれと本を手に取るうちに、あっ言う間に、本屋の中を一周していた。もうそこは出口であり、入り口だった。

　良太はもうこれ以上本屋にいても仕方がないと思い、そのまま書店を出ようとする。背中越しに「本を買ってください。立ち読みはダメです」との声がする。レジの前のロボット店員の声だ。

「だって、ここの本は、二番煎じか、三番煎じで、薄めたような内容の本ばかりじゃないか。面白くともなんともなく、パロディにもなっていないじゃないか。こんな本なんか、誰が買えるかよ。それに、俺はメールでここに呼ばれて来たんだよ。人を呼んでおいて、呼んだ本人は出てこないのか。失礼な本屋だ」と、ロボット相手に文句を言っても仕方がないと思いながらも、つい愚痴が出た良太。

「それなら面白い本を書いてください」

「えっ」

　良太は振り向く。小さい声でグチったはずなのに、ロボット店員には聞こえていたのだ。後ろを振り向く。ロボットが天井からぶらさがっている紐を引っ張る。

「あっ」という声とともに良太の視界は、ロボットの顔から胸、レジのカウンター、本屋の床へと変わって行く。お掃除ロボットが、良太の足跡を消すかのように、本屋の中を本棚にぶつかりながら忙しく動き回っているのが見えた。そして、落ちて行く感触と共に、目と脳が暗闇となり、意識が途切れた。